伝飛鳥井雅経筆六条宰相家歌合　影印と翻刻

日比野　浩　信

六条宰相家歌合は、永久四（1116）年六月四日に藤原実行が自邸で催した歌合。『平安朝歌合大成』[1]では「永久四年六月四日　参議実行歌合」と呼称している。六条宰相は、実行の舅にあたる、この歌合の判者で六条家の始祖藤原顕季のことであるが、主催者実行と顕季の邸宅とが同じ敷地内にあったため故の名称であろうと推測されている。子日・霞・桜・郭公・五月雨・夏草・女郎花・月・紅葉・雪・霰・水鳥・祝が各一番、恋二番の一四題一五番で三〇首からなり、作者は主催者の実行、判者の顕季、講師の家信・道経、読師の俊頼・仲実をはじめ、顕輔・雅定らで、顕季一族を中心とした有力歌人達が参加している。

伝本は伝飛鳥井雅経筆巻子本のほか、彰考館文庫蔵本、内閣文庫蔵本、群書類従本などがある。いずれも同一系統と見なされているが、伝飛鳥井雅経筆本を第一類とすれば、歌人名表記などの異なる彰考館文庫蔵本[2]、内閣文庫蔵本は第二類、群書類従本はこれらの混態本文と見られている。因みに内閣文庫蔵本は、彰考館文庫蔵本を、若干の例外と誤脱も認められるものの、行詰に至るまでほぼ忠実に転写したものである。

六条宰相家歌合は『大日本史料』[3]『平安朝歌合大成』『新編国歌大観』に、伝飛鳥井雅経筆本を底本として翻刻されており、しかるべき本文の提供がなされている。なお、『編纂類聚歌合とその研究』[4]では「後記」において触れられており、本

文の翻刻はなされていない。ただ、今後の研究の進展に伴い、殊に重要な伝飛鳥井雅経筆本は、原本の披見が望まれるのも当然のこととなろう。

幸いにして、伝飛鳥井雅経筆本を調査する機会をお与えいただいた。当該本は、縦二六・七センチの巻子装一巻。(5) 本文は十紙からなり、第一紙四七・五センチ、第二紙四七・九センチ、第三紙四八・二センチ、第四紙四七・八センチ、第五紙四七・九センチ、第六紙四七・八センチ、第七紙四八・二センチ、第八紙四七・八センチ、第九紙四七・八センチ、第十紙二三・三センチの四五四・二センチ。本紙の後に二四・五センチの継ぎ紙があり、更にその後に一二・五センチの別の継ぎ紙を施して

右一巻飛鳥井殿雅経卿之真跡也／古筆了佐（花押）

という、古筆了佐の加証奥書がある。本文の料紙下部五ミリ程の所に罫線がある。現状に改装が施されていることは、裏打ちのなされていることからも明らかである。ただ、十三番の歌題「祝」の終筆部が、料紙の下に潜り込んで文字が切れており、そこに継ぎ足すかのような墨の点があるのは、本文書写の後のいずれかの段階で、現状への改装以前にも、改装がなされている可能性を推察させる。

これまでになされた翻刻は、直接原本によっているものと思しく、提供された本文に殊更に訂正を要する箇所は認められない。ただ、番付・題・左右の別・勝負付けの位置関係が、七番以前と八番以降では異なっており、

一番　子日
左　持

十三番
左　祝
持

のように左右の別が、左行の勝負付けの上から、右行の題の上へと移動している。また、四番判詞三行目、六番左作者名に明らかな擦り消し跡、さらに、判詞において左右の歌の区別を明確にするためであろう、一～二字程度の明らかな空白、(6) 他にも一番判詞二行目「おきて」の「き」は「か」の上に重書、七番判詞七行目「花みてこそ」の「て」は「か」らしき

文字を書いた上に重書などがみられる。これらは、これまでの活字本文では表れ得なかった点である。

ところで、六条宰相家歌合が二十巻本類聚歌合に収められていたか否かは、参議非参議の歌合を収めた巻第十四の目録が散逸しているため明白ではないが、この点について否定的な意見は見られない。当該六条宰相家歌合は、二十巻本中に収められていたと考えてよかろう。ただ、伝飛鳥井雅経筆本を二十巻本そのものと考えるか否かは説が分かれるところで、堀部正二氏と久曽神昇氏が(7)二十巻本であると認定しているのに対して、萩谷朴氏は否定的である。特に堀部氏と萩谷氏は、二十巻類聚歌合所収歌合の性質や当該歌合の所収位置関係から、虫損の幅にまで注意されての詳細な検討であり、これ以上の追求は稿者などの及ぶところではない。

ただ、当該本は、下部わずか五ミリ程のところに罫線が引かれた縦二六・七センチの料紙に書写されており、上部書き出し位置もわずか五ミリ程で、最も狭い所（十三番番付）などは三ミリ程しかない。料紙・筆跡共に他の二十巻本と一致するわけではないが、独立した一巻の歌合巻としては上下が詰まった印象を受ける。他の二十巻本類聚歌合巻が縦二六・五センチ～二七センチ程(8)であることを考慮するに、当該本も同寸であることは単なる偶然とは思われない。二十巻本の中には、改めて書写することなく既存の歌合を編入している例もある。二十巻本歌合に編入の際、料紙の上下を裁断して高さを合わせたと考えることができるのではなかろうか。また、二十巻本は、歌合の末尾から二～三行を空白として料紙を裁断、次の歌合を継いでいるが、当該本の本文末尾（第十紙）が本文の後に、やはり二～三行分を空白として裁断されているのも、他の二十巻本に見られる傾向と一致する。当該伝飛鳥井雅経筆本が編入された二十巻本そのものであるという可能性を、強ち否定することもできないようにも思われるのである。

いずれにせよ、伝飛鳥井雅経筆本は平安期の書写にかかる歌合証本として極めて重要である。

国文学的資料としてのみならず、文化財としても貴重な存在であり、今後、容易に披見できるものではない。この点を鑑み、広く研究者の便宜を図るべく、所蔵者のご理解を得て全本文を写真版で掲載させていただくこととなった。

ご高配下された所蔵者に衷心より御礼申し上げる。

注

（1）萩谷朴氏『平安朝歌合大成　三』（昭和三十二年　私家版↓昭和六十二年復刊　同朋社）↓『平安朝歌合大成　増補新訂二』（平成七年　同朋舎出版）

（2）彰考館文庫蔵本と内閣文庫蔵本は国文学研究資料館のマイクロフィルム紙焼き写真による。

（3）東京大学史料編纂所『大日本史料第三編之十七』（昭和三十六年　東京大学出版会）

（4）堀部正二氏『纂輯類聚歌合とその研究』（昭和二十年　美術書院↓昭和四十二年　大学堂書店）

（5）都合により、伝来・所蔵に関する記述を避けるため、箱や付属物・表紙等については省略に従った点をお断りしておきたい。

（6）『大日本史料』では底本通りの空白を置いて翻刻されている。

（7）久曽神昇氏『書道全集　第十四巻』解説（昭和四十一年二月　平凡社）

（8）国文学研究資料館編『特別展示　近衛家陽明文庫　王朝和歌文化一千年の伝承』（平成二十三年）↓『陽明文庫王朝和歌集影』（平成二十四年　勉誠出版）

（文学部非常勤講師）

六條宰相家歌合　永久四年

判者　修理大夫

講師　左　散位家任
　　　右　散位道経

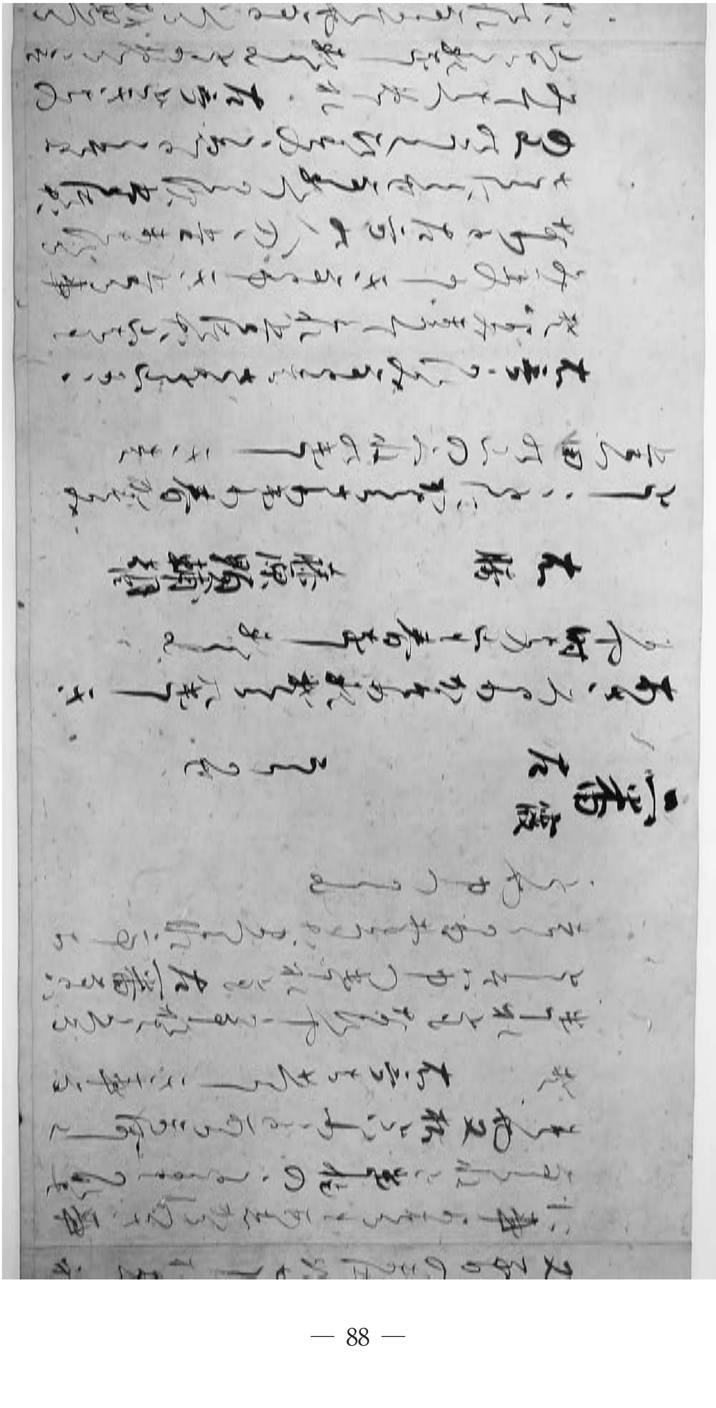
読師　左　前木工頭俊頼朝臣
　　　右　散位仲実朝臣

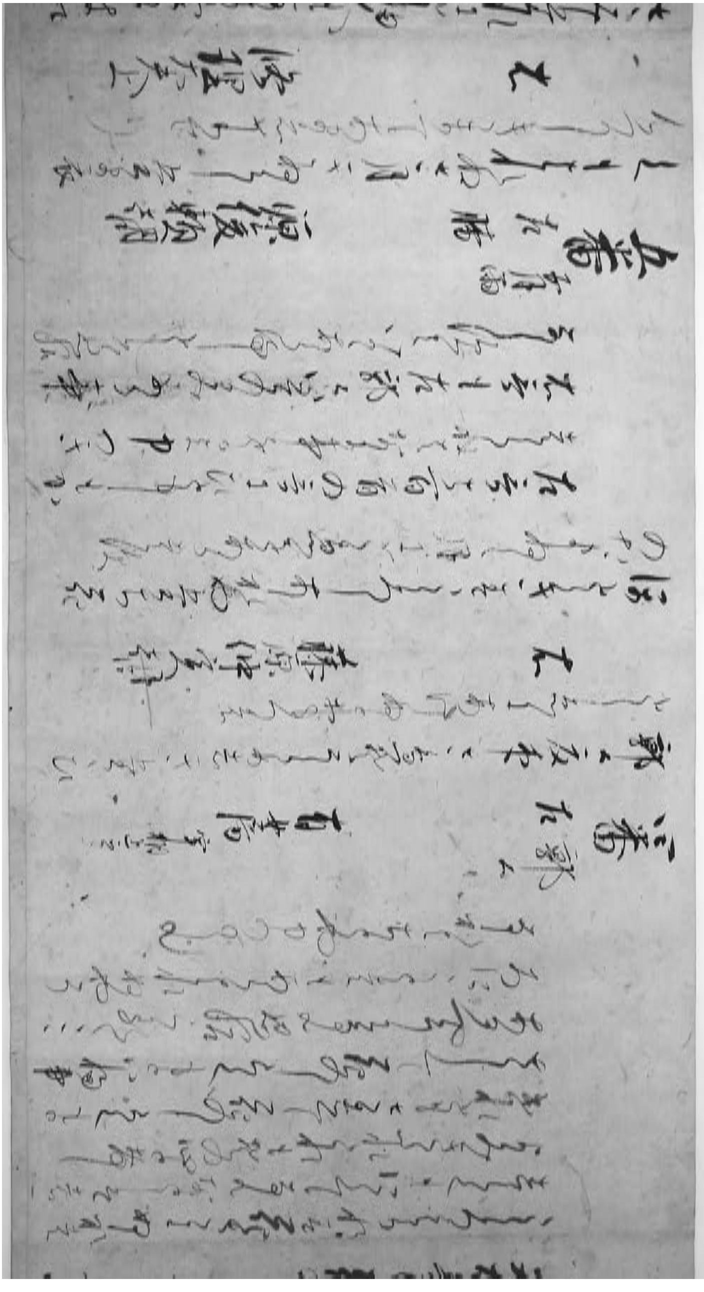
一番　子日
左　持　源俊頼朝臣

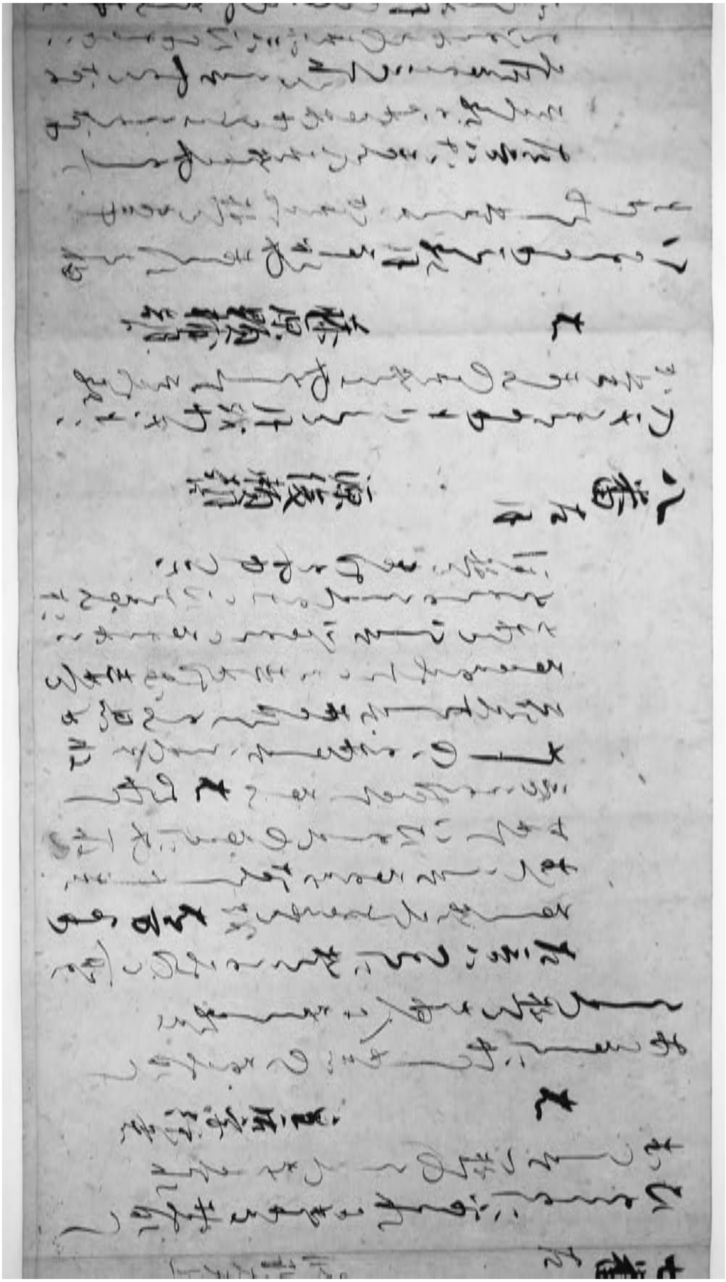
[illegible]

右　[illegible]

[illegible]







七番 左

[illegible]

右 皇后宮[illegible]

[illegible]

左云ハ[illegible]

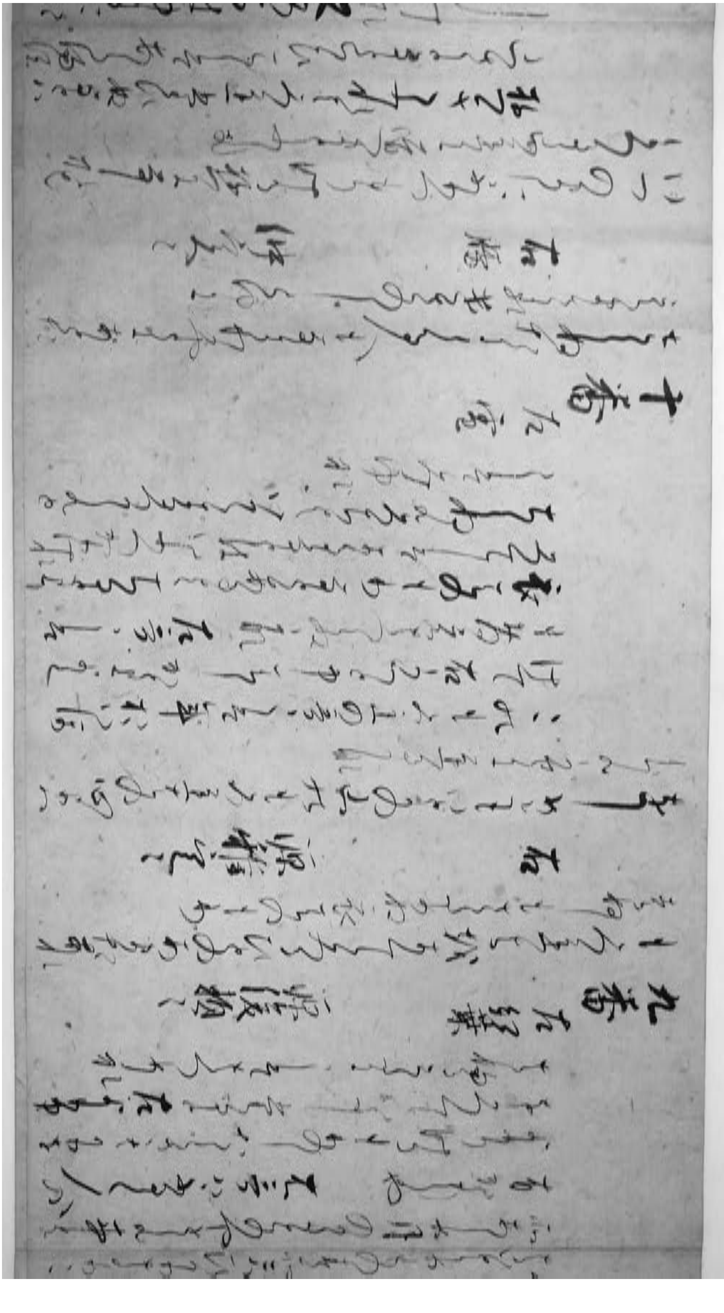
[illegible]

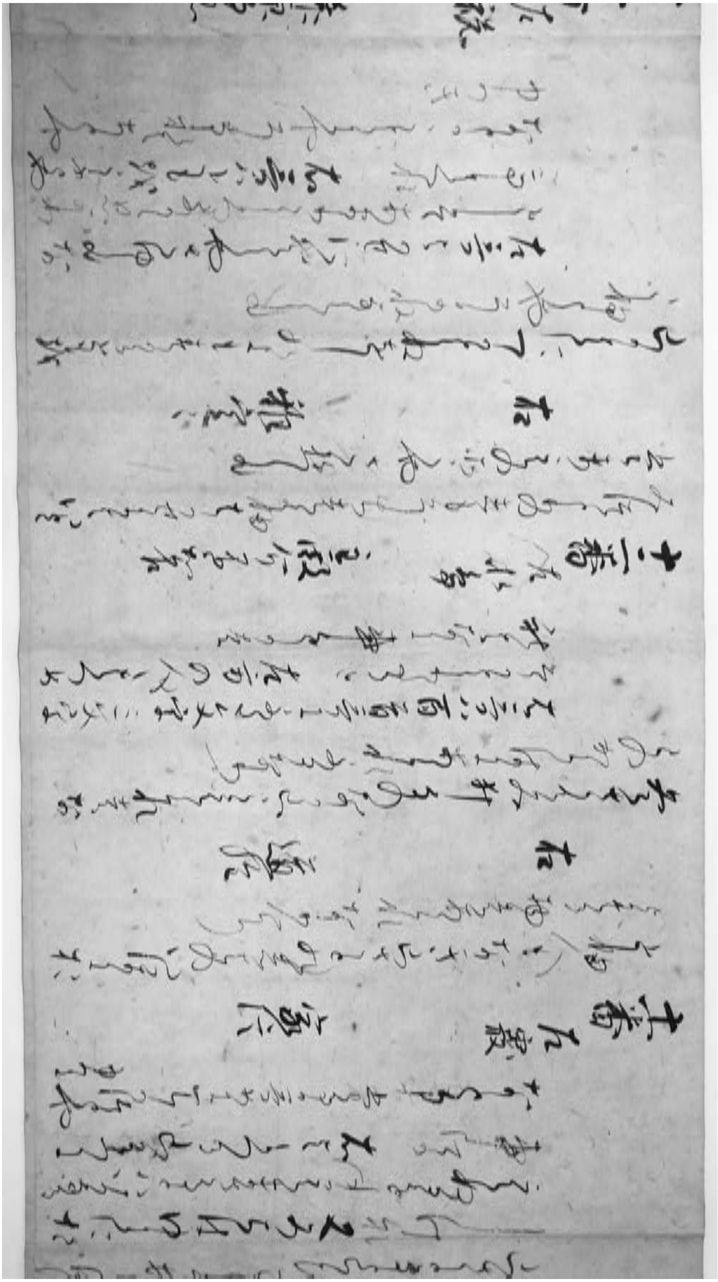
八番 左 月 源俊頼朝臣

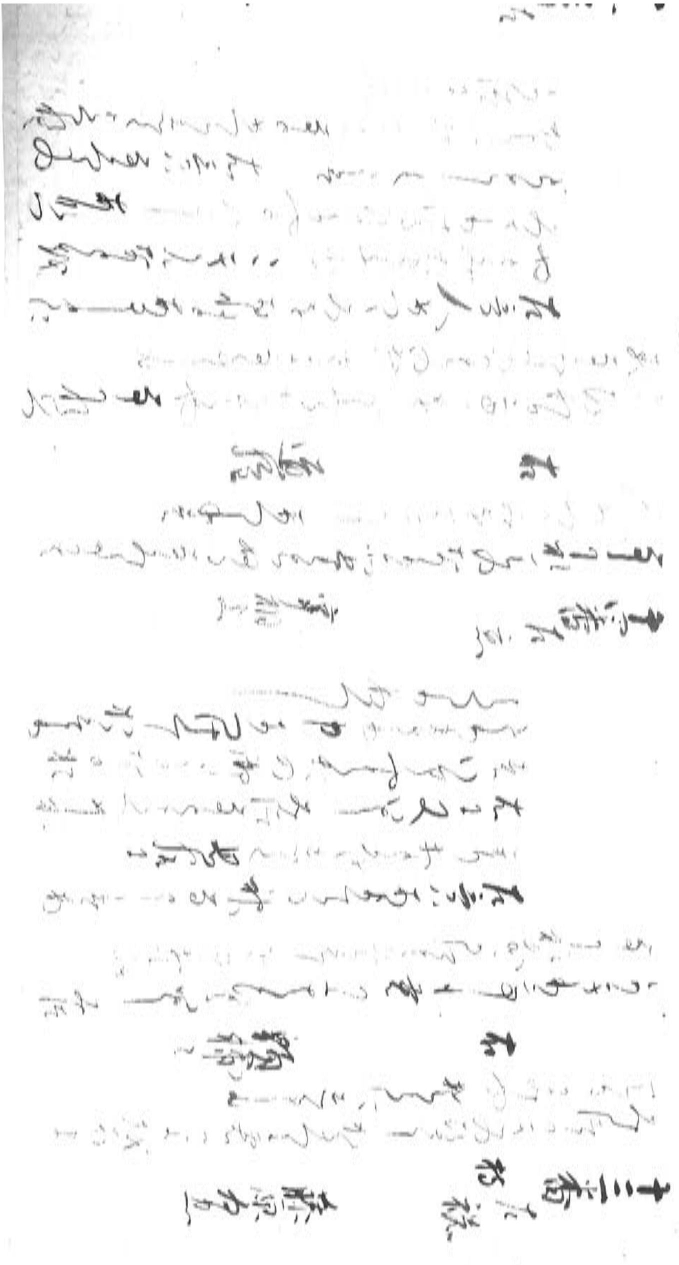
[illegible]

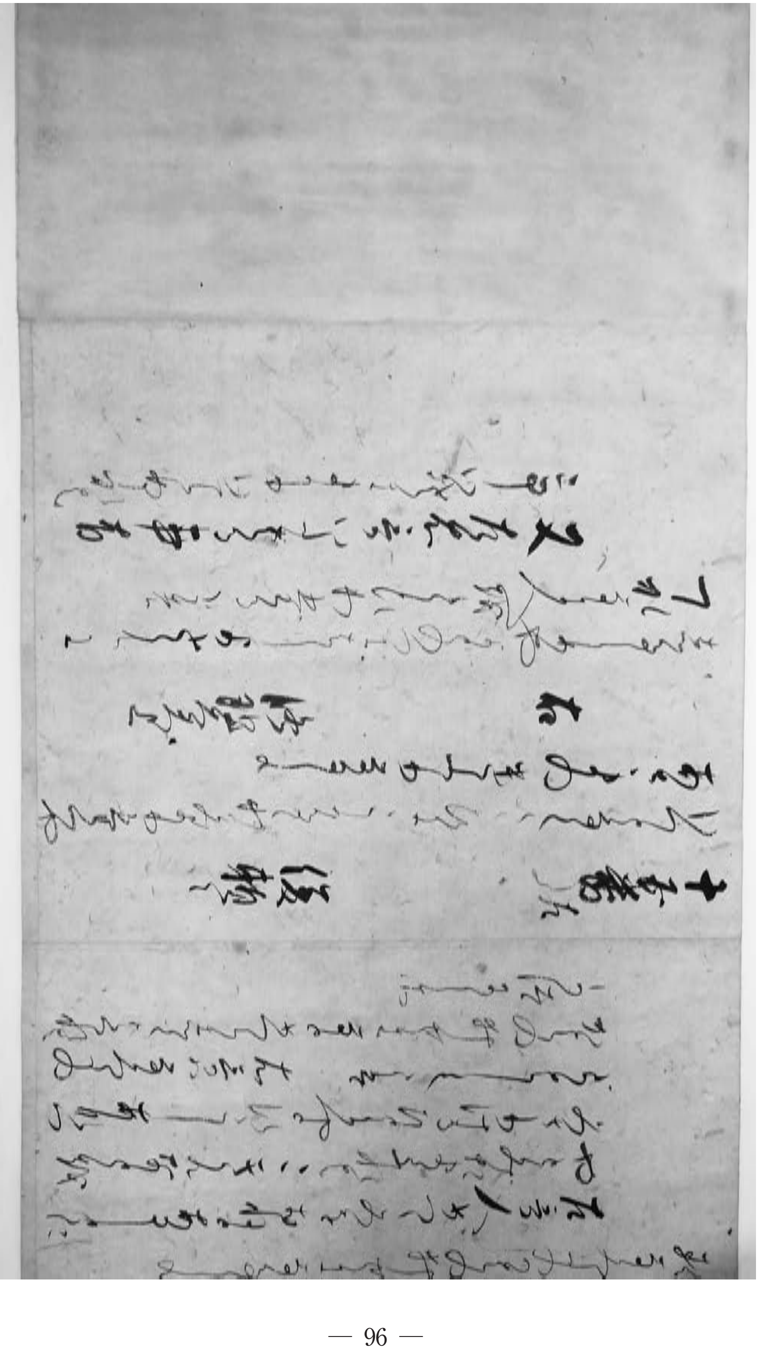
右 藤原顕輔朝臣

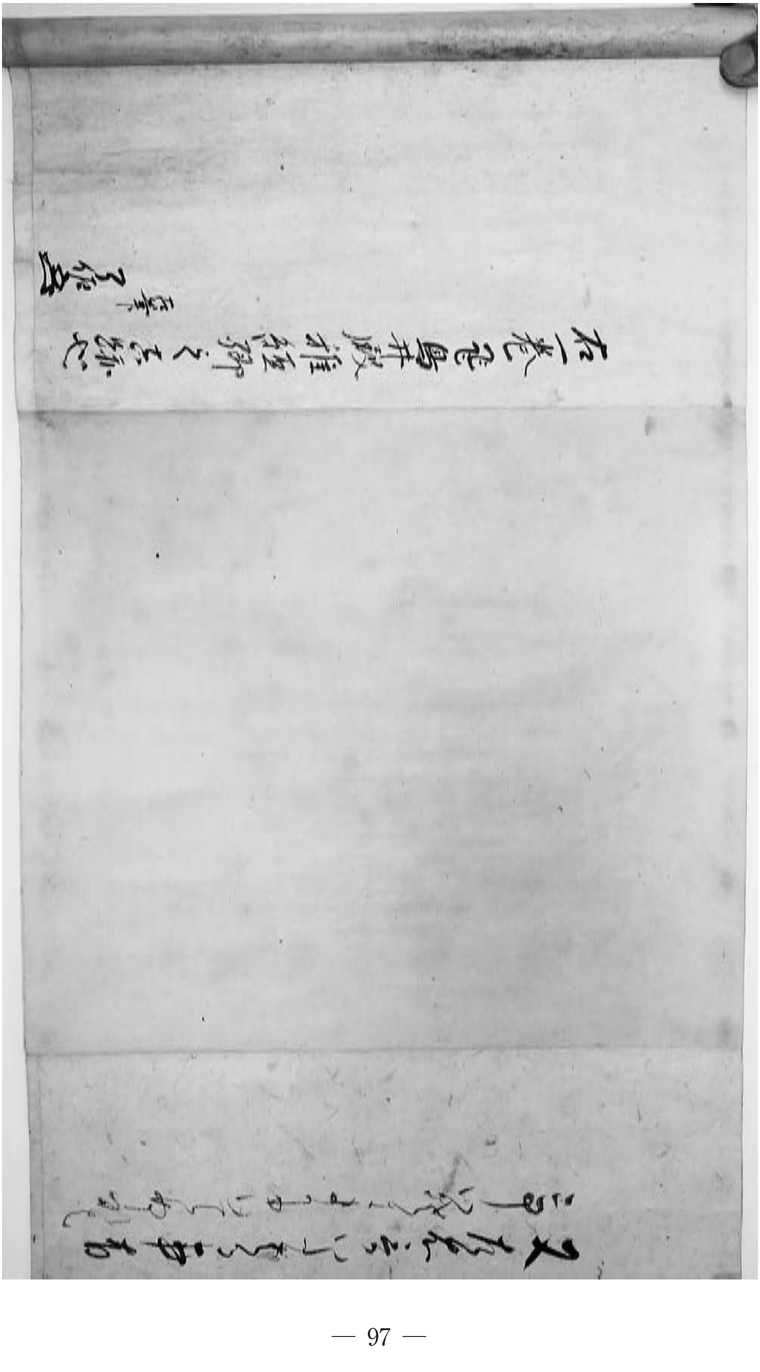
[illegible]










右一巻飛鳥井殿雅經卿之真跡也
了佐

【翻刻】

翻刻に際しては、以下のような方針とした。

一、漢字・仮名の別、仮名遣い、改行、意識的な空白などは、全て底本のままとした。

一、底本では、左右の別、判詞などの書き出し位置に多少のズレがあり、必ずしも総一されているとはいえないが、本翻刻ではそれぞれを揃えることとした。

一、異体字は、概ね通行の字体に改めたが、底本通りに残したもの（哥など）もある。

一、底本には、本文を擦り消して書き直した箇所があるが、擦り消された文字が判読できる場合も、一々指摘することはせず、書き直された本文によった。重書も同様、上書された文字によった。

一、「ん」の字体については、「も」と読むべきは場合は「も」としたが、「む」とよむべき場合にはそのまま「ん」とした。

一、作者名の後のヲドリ字は、「丶丶」なのか「〻」なのかの判断に迷う場合があるが、全て「朝臣」の二文字を示すものとみて「丶丶」に統一した。

一、歌の末尾には（　）に入れて『新編国歌大観』番号を記した。

一、料紙の継ぎ目には、その料紙の最終行に　」　を付した。

一、底本に衍字・脱字などが認められる箇所には（ママ）とした。

六条宰相家歌合　永久四年

判者修理大夫
講師左　散位家信
　　右　散位道経
読師左　前木工頭俊頼朝臣
　　右　散位仲実朝臣

一番　子日
　左　持　　源俊頼朝臣
かすかやまふもとの小野にねのひ
してかことを神にまかせてそみる（一）
　右　　修理大夫上
子日する野辺のこまつをもろひ
との君かよはひにひきかくるかな（二）
　左哥ことはつかひなたらかならす
又子日のまつをさしおきて神　」（第一紙）
に事よするもあしかるへき事
ならねとけふのことにはかなは
すや又松といふことあらまほしく

そ　右哥はめつらしき事な
けれともなひやかなれはかつな
とこそは申へけれとも左一番なとは
は丶かりおもうたまへられてち
とや申へからん

二番　霞

左　　　うらかせ
あさみとりかすめるそらのけしき
にや時（ママ）はの山も春をしるらん（三）
右　勝　　藤原顕輔朝臣
としことにかはらさりけり春かすみ
たつ田の山のみねのけしきは（四）
　右哥かすみなとはさを山にこ
そよみまうてくれたつた山はも
みちのにしきなと申きたる事
なりと左方の人の丶たまはする
さらにくせなるへからすたつた
の山のうくひすのこゑとこそよ
みてはへめれ　左哥ときはの

山はゝるをしるらんとよめるこそ
おのれなきてやなといへるを思へる
にやにぬことにてなんかれはし
かのこゝろある物にてしるにこそ
山はしらむことかたくなんしる
とてもいかやうにあるへきにか
されはまけとや申へからん
」（第二紙）

三番　桜
左　持　　藤原実能
花さかりすゑのまつ山かせふけはう
すくれなひのなみそたちける（五）
右　　藤原仲実朝臣
たかさこの花のしらくもたちに
けり我山もりになりやしなまし（六）
この桜哥こそ思給あつかひにたれ
まちかきさくらさくところはむか
しもいまもあまたよみきたる
ところをさしすきて花もよみこ
ぬすゑのまつ山まことに思かけ

られすむねと又まつの花とみえ
たりうすくれなゐといふことはそ
のかみよみたりしのちよりいまは
よみはへらす方〻思かけられす
又右哥は花のしらくもとはへるも　」（第三紙）
こゝろえられす花さきぬれは
しらくもにゝてなんなとこそは
よみきたれこれもその心とおほし
けれともさして花のしらくもと
さして花（マ）のしら（マ）くもといふ事
あるやうになん思給らるゝこゝ
ろにことはもあらはれぬやう
なれはちとや申へからん

四番 郭公

左　　　　有女房 宰相上云〻

郭公夏夜さへそうらめしきたゝひ
とこゑにあけぬとおもへは（七）

右　　　　藤原仲実朝臣

ほとゝきすこゝろしあれやたち花

のたまぬく月にこゑをあらはす（八）
左哥は百首の哥にひともしもか
はらねはなに事をかは申へき
右哥も左郭公いそのかみふる事
ならすはいかゝあらましとこそ思給

五番　五月雨
左　勝　　源俊頼朝臣
くもはれぬさ月きぬらしたま衣
んつかしきまてあましめりせり（九）
右　　修理大夫上　　」（第四紙）
さみたれにとふ人もなき山さとはの
きのしつくのおとのみそする（十）
左のさみたれはふるめかしからぬ
ことはなれとんつかしなとこそ
むけにたゝことはにてけひたる
やうに思たまふれとも右のはめ
なれたるさまなれはまくとや
申へからん

六番 夏草

左　　　　　　　　女房

うつらなくなつのゝくさはおひにけり
朝ふすしかもみえぬはかりに（一一）

右　　　　　　　　修理大夫上

ゆきなれしみちわすられて夏草
のむ（ママ）はふはかりになりにけるかな（一二）

左夏草はくせなくみたまふれ
と右よりうつらは秋なんなく夏
なとはなかぬ物なりとはへめれはは（ママ）
せうこそはいたさるへけれとそ
のいてこねはあやまれるにや右
哥はむすふ許になりにけり
とはへるはのかひしこまのこゝちなん
するとはへめれはむねとあるふし
にはあらねはみちわすられてなと
こそはふしに思たるや（に）とみゆれ
は右のかちにこそ

七番　女郎花

左　　　　　修理大夫上　　　　」（第五紙）

ひとことにをられにけりなおみなへし
むへこそつゆのこゝろをきけれ（一三）

右　　　　　皇后宮津君

あかなくにわかしめしのゝをみなへし
こゝろゆるさぬ人にをらるな（一四）

左哥はへちにそことみゆる所は
なくそみたまふるを右方より
むへこそなとをなんし申は
せめていひところのなきにやつねの
哥ことはにてなん右のわかし
めしのゝとあるこそこゝろえね
花みてこそあかなくとも思め
なにをみてかはしめけむしめつる
とあらはこそ心にはかなはめこ
とはとこゝろとちかひてなんお
ほゆるまけとや申へき

八番左　月　　　　源俊頼朝臣
のきはよりもりくる月をわきもこ
かたまものすそにやとしてそみる（一五）
右　　　　藤原顕輔朝臣
いかはかりてる月なれやまくすはふ
もりのしたくさかすみゆるまて（一六）
左哥はたまものすそにやとして
そみるとよめるありかたきことなり
みつなとにうつれるこそやとるなと
はいはめものすそにはひかりはかりこ」（第六紙）
そあらめ月のかたちのやとらん事は
有かたくや　　右哥はふるく人の
よめりけるもりのしたくさはかりを
をかへていたしたると左より申（ママ）
はふるうたにこそはへめれ

九番左　紅葉　　　源俊頼〻〻
もみちはをきてみるひとのあまたあれ

はぬしもさためぬ衣てのもり（一七）

右　　　源雅定丶丶

をしめともいとかの山のもみちはの心よは

くもかせにちるかな（一八）

このもみちの哥こそ年おいほ

けて右かつと申てしかとよよく

もおほえはへらぬかな　左哥こそ

衣てのもりなとあるはちるとよ

みてこそきるなとはいふへかりけれ

ちらぬもみちはいか丶きるへからんと

こそみゆれ

十番　左　雪

さらぬたにくる人もなきわかやとにあとた

えまさるけさのしらゆき（一九）

右　勝　　　仲実丶丶

いつのまにふりつもりけるゆきなれは

かへる山ちに道まとふらん（二〇）

ゆきふれはみちたえぬなとは

山さとなといひてこそあらまほ」（第七紙）
しけれ又みちはゆきにた
えぬるをたえまさるとはいかなる
事にか　右はかへる山ちに
なと申たるか哥めきてかつとや申へき

十一番左　霞　　家信
とふ人もなき山さとのしはのいほにお
とする物はあられなりけり（二一）
右　　道経
冬さんみゐなのなか山こえくれはな
らのからはにあられふるなり（二二）
右哥は百首哥にふた文字み文字
そかはりたると　左方の人〳〵はへめ
れはなに事をかは

十二番左　水鳥　　主殿介不知名
みつとりのしもうちはらふはかせにはいとゝ
たまえのそこやさゆらん（二三）

右　　　　　　雅定丶丶

山かはにつかはぬをしのよもすからともを
こふとやうきねなくらん（二四）

左哥はかせにそこやさゆらんな
とこそあまりこゝろふかく思より
てはへれ　右哥はともをこふとや
なとかこはきやうなれはちとや
申へき　　　　　　　　　　　」（第八紙）

十三番　祝
左　持　　　　　藤原為忠

みつかきのひさしかるへき君かよをあま
てるかみやそらにしるらん（二五）

右　　　　　　顕輔丶丶

かきりても君かよはひはいはしみつ
なかれむよにはたえしとそおもふ（二六）

左哥はあまてる神なとこそあ
まりおとろ〳〵しく思給に
右に又いはしみつなとはへめれ
はいせやはたの御ことなとお

とりまさり申につけておそり
はへりぬへし

十四番 左　恋　　宰相上
なかれてのなにそたちぬるなみたかは
人めつゝみをせきしあへねは（二七）

右　　道経
こひわひてをさふるそてやなかれいつ
るなみたのかはのゐせきなるらん（二八）

左哥人めつゝみをむねとあることに
やとみたまふれはこきんなとを
みさりけるひとにやとすこしあなつ
らはしくこそ　右哥はなみたの
かはのゐせきなとめつらしくはへれは
かつにこそ

」（第九紙）

十五番 左　　俊頼ゝゝ
いつとなくこひにこかるゝわかみよりたつや
あさまのけふりなるらん（二九）

右　　　修理大夫上

しるらめやよとのつきはしよと丶もに
つれなき人をこひわたるとは　（三〇）
　又左右哥いたはる事有
てい　そきまかりいてぬれは　　　　　　」（第十紙）

（空白）　　　　　　　　　　　　　　　」（継紙一）

右一巻飛鳥井殿雅経卿之真跡也
　　　　　　古筆了佐（花押）　　　　　」（継紙二）